

# トマス・アクィナスにおける cooperatio

— 第一原因と第二原因の文脈における  
この語の使用を手掛かりとして<sup>1)</sup> —

松 村 良 祐

## 1 はじめに：問題の所在

13, 14 世紀の思想界において、第一原因と第二原因に関する教説、とりわけその神と自然的作用者の関係に対して両者の協働関係を示唆する語が当てられることは、一般的な傾向であったように思われる。ボナヴェントゥラやスコトゥスといったこの時代の神学者らは、神と自然的作用者の関係を説明する際に cooperari や concurrere といった語を多用している<sup>2)</sup>。勿論、自然的世界に対する神の根源性を主張するキリスト教神学者の立場において、神の働きは何らかの仕方でも自然的物に対して関わるものである以上、大抵の場合、自然的世界に生じる事象の原因は神と自然的物の二つに帰されることになる。そのことはトマスの教説にあっても同様である。それゆえ、こうした意味で cooperatio を理解するのであれば、この語の内にトマスの教説もまた包含され得るかもしれない<sup>3)</sup>。しかし、いまトマスにおける神と自然的作用者の関係を紐解く上で我々の目を引くのは、ボナヴェントゥラら同時代の神学者らとは異なったそこでのトマスの用語法である。

実際、トマスが神と自然的作用者の関係について言及しているテキストの中には、上記のような両原因の協働関係を示唆するような用語は見出されない。例えば、トマスが神と自然的作用者の関係について集中的に論じている『命題集註解』第2巻第1区分第1問題第4項や『対異教徒大全』第3巻第66-70章、『能力論』第3問題第7項、『神学大全』第1部第105問題第5項において、上記の語は見出され得ない。むしろ、そこに見出される語は、「神が道具的な仕

方で被造物を〈動かす (movere)〉や「被造物は神の力を〈分有する (participare)〉ことによって働く」といった一方の他方に対する従属関係を想起させるようなものばかりである<sup>4)</sup>。トマスが同時代の大方の潮流に反して神と自然的作用者の関係に「co-」という共通の地平を設置しなかったのは、果たしてどういった理由からだろうか。

本稿では、cooperatio という語に関する考察を通じて、トマスが神と自然的作用者の文脈においてこの語を使用しなかったことの原因の解明に迫りたい。後述するように、トマスが cooperatio という語を以て意図する神と被造物の関係は、主に恩寵を通じての神と人間のそれである。それゆえ、我々はそれら二つの関係の差別化を図ることも後々迫られるであろう。

その為に、まずこの問題の前提となっている神と自然的作用者の関係についてのトマスの基本的立場を確認する。次いで、cooperatio という語に関するトマスの理解の独自性を明らかにする。更に、これによって明らかとなったこの語の持つ性格から、トマスがこの語を以て本来的に意図する神と被造物の関係が恩寵を通じての神と人間の関係にあることを見る。そして最後に、トマスがこの語の照準を神と自然的作用者の関係ではなく、恩寵を通じての関係に合わせたことの意義を探りたい<sup>5)</sup>。

## 2 神と自然的作用者の関係に対するトマスの基本的立場

我々はトマスの cooperatio についての理解を考察する前に、この問題の前提になっている神と自然的作用者の関係についての彼の基本的立場を確認しておこう<sup>6)</sup>。

トマスは、神と自然的作用者という二つの原因が同一の自然的結果に関わると言うとき、両者に根源的原因 (causa principalis) と道具的原因 (causa instrumentalis) という語を当てることによって説明を試みている。トマスは言う。「つまり、道具的なものは何らかの仕方根源的原因の (為す) 結果の原因なのであるが、それは固有の形相或いは力によってそうなのではなく、むしろ、そのものの運動を通じて根源的原因の力の幾分かを分有する限りにおいて

そうなのである<sup>7)</sup>。このように、自然的作用者の内には、それが道具として本来持っている力と根源的原因たる神によって与えられた力という二つの力が考えられる。その際、道具たる自然的作用者は、神という根源的原因によって動かされ、その力を分有する限りにおいて、産出された結果の原因となり得るのである。それゆえ、我々は産出された結果の原因を、当の働きを実行する基体である道具的なもの（自然的作用者）とその働きを可能にする力を与える根源的原因（神）の双方に求めることができるのである。

しかし、この場合の根源的原因と道具的原因の関係とは存在論的身分を同じくするもの同士のものではない。トマスにおいて、作用者はその現実態性 (actualitas) の度合いによってその段階が異なるものである以上、根源的原因と道具的原因という言葉によって表されるこれら二つの作用者は、例えば指揮官とその部隊に属する一兵卒の関係のように、存在論的身分の異なるもの同士の関係として理解されるものなのである<sup>8)</sup>。かくして、トマスにおいては自然的作用者には固有な働きの領域が確保されているにしても、その領域はそれを動かしている神の働きという超越的な視点のもとでしかないのである。

このようにして見ると、トマスは神と自然的作用者が異なった次元に属する作用者であるという基本的前提の上で、二つの原因が共通の地平に立っていることを想起させるような表現を意識的に抑えつつ、両原因の関係の説明を試みたようにも思われる。それでは、トマスが両原因の関係に「co-」という協働の地平を示唆する語を当てないこともまた、両原因の存在論的身分の相違に理由があるのだろうか。確かに、トマスはその著作の至る所で神の力の超越性について触れている。しかし、後に我々はトマスにあっては cooperatio が恩寵によって与えられる神と人間の関係に主として適用されていることを確認するが、その時には、なぜトマスの教説にあって、神と自然的作用者の文脈では両者の身分の相違が叫ばれることになり、そこに「co-」という地平は現れてこないのか、と再度問い直すことになる。少なくともボナヴェントゥラの用語法を見る限り、彼らは単に神と自然的作用者の関係のみならず、恩寵を通じての関係にもこの語を用いているのである<sup>9)</sup>。この意味でトマスは神と自然的

作用者に関する説明において、彼らの用語法とは異なっていると言えるのである。

以下で、我々はトマスの *cooperatio* という語に関する理解からこの理由を考察していくことにしよう。

### 3 トマスにおける *cooperatio* の基本的理解

さて、ラテン語の *cooperatio* に含まれる接頭辞 *co-*には「一緒に」「共に」「～の中で」「～を以って」などの意味があり、この語全体としては「協働」「合力」「結合」「合同」といった意味を持つことになる。そして我々が問題としている文脈ではトマスがこの語を「協働」や「合力」という意味で用いていると言ってよい。つまり、複数の作用者が同一の働きに関わるという事態を意味している。そしてこの表面的な意味においては、トマスとボナヴェントゥラら同時代の神学者とは同じだと言い得るかもしれない。しかし、*cooperatio* に関するトマスの記述をその最も詳細な説明となっている『ギリシア人の誤りを駁す』やその他のテキストにおいて見てみると、他の神学者とは異なった特徴を見いだすことができるのである。以下で、『ギリシア人を駁す』をもとにこの語が持つ特徴を浮き彫りにしてみよう。

トマスは、まずこの箇所において、神と被造物の協働の根拠を「聖徒たちは神の扶助者であり、協働者であるとも言われる (*sancti dicantur esse Dei adiutores et cooperatores*)」<sup>10)</sup>という聖句に求めている。次いで、「一方のものが他方のものに協働する (*cooperari*)」という事態を次の二つのケースに分け、分析を行っている。すなわち、その内の一つは、一方のものが他方のものの力を通じて (*per aliam virtutem*)、同一の結果に関わる場合である。トマスがここで挙げるのは、召使いが主人の命令を実行するという事例や道具が工作者によって動かされるという事例である<sup>11)</sup>。トマスが主人と召使いという例をあげているように、このケースにおいて、*cooperatio* は基本的に上位の作用者と下位の作用者との間で考えられている。そして、その際、下位の作用者(召使い)は、自身の力で当の働きに関わることは出来ず、上位の作用者(主人)の

下す命令の媒介 (medium) となることでその命令の実行に携わることになるのである。いま一つは、何か重たい物を二人で運ぶ場合や舟を複数の漕ぎ手で漕ぐ場合のように、個々のものが自己の力で以って (cum ipso) 同一の結果に関わる場合である<sup>12)</sup>。これら二つのケースの内、トマスが神と被造物の間に cooperatio を認めているのは、前者のケースである。後者は、トマスによれば、神の働きに関しては三位一体の構造にのみ当てはまるものであって、神の被造物への働きには適用されない。

とはいえ、この前者の cooperatio の用法によって被造的世界に生じる事象全てが説明し尽くされるわけではない。cooperatio によって説明されるのは、当の結果に対して被造物が神の媒介 (medium) となってその働きを実行する場合であって、創造や聖化 (sanctificatio) のように、神が被造物を伴わずに無媒介的な仕方 (immediate) で結果を産出する行為はこの語の対象ではないのである。それでは、トマスがこの前者の cooperatio の用法を説明する際に念頭に置いていたのは、具体的にどのような状況なのだろうか。

ところで、トマスが cooperatio を説明する際に挙げた「工作者と彼が用いる道具」や「主人とその召使い」といった事例は、我々が前節で見た、神と自然的作用者の関係を思い起こさせるものでもある。しかし、トマスにあって、こうした事例は存在のレベルが異なる二つの作用者を説明する為のものであり、それは神と自然的作用者の関係のみならず、天使や人間を含めた被造物全般と神の関係を述べる際にも見出される<sup>13)</sup>。それゆえ、我々はかかる事例からトマスが上記の『ギリシア人を駁す』の中で意図している神と被造物の関係を即座に言い当てることはできない。むしろ、この語の実際の使用例から明らかなのは、トマスにあって、この語は恩寵を通じての神と人間の関係に集中して見られるということである<sup>14)</sup>。トマスは言う。「我々は至福の原因が二様であることを考察しなければならない。一つは神の側からである。つまり神の祝福である。いま一つは我々の側からである。つまり自由意志に属するところの功德である。すなわち、我々は無為に過ごすのではなく、神の恩寵と協働 (cooperari) しなければならないのである」<sup>15)</sup>と。また、「人間は作動的な恩寵

を通じて、神によって善を欲するように扶助されている。それゆえ、前もって目的が定められている場合には、恩寵は我々と協働する (cooperari) ののである』<sup>16)</sup>ともある。

しかし、上記の文脈にこの語が集中しているのには、いかなる理由があるのだろうか。更には、「工作者とその道具」や「主人とその召使い」といった同じ事例の内に括られつつも、神と自然的作用者の関係と恩寵を通じての神と人間の間にはどのような相違があるのだろうか。我々はこの問題に立ち入る前に、『神名論註解』の一節を考察することで彼の cooperatio 理解にもう少し耳を傾けてみよう。そこでの議論の中心は被造の世界を構成する秩序 (ordo) であるが、トマスはその中で秩序を構成する為に必要な事柄の一つとして上位の作用者と下位の作用者の協働 (cooperatio) を挙げ、一方が他方に協働するという事態に更なる分析を加えている。以下で、この箇所にしたがって見てみよう。

トマスによれば、この世界の内に見られる多様な存在者は、それが物的な事物であれ靈的な事物であれ、究極的には神の摂理という一つの秩序の下に包含されている。実にこの一見バラバラな諸実体の集合とも見える世界は、それらを究極目的へと導く神の摂理の下に含まれることで初めて本来の働きを果たすようになるのである。その際、トマスは諸々の実体はその究極目的へと到達する為には上位の作用者との協働 (cooperatio) が不可欠であると言う。そして、そうした協働の内には、高揚 (elevatio)・配慮 (providentia)・守護 (custodia) の三つの特質が見出されるとされる<sup>17)</sup>。すなわち、或る秩序の下に含まれているところの下位の作用者は、上位の作用者との協働を通じて、その力がより高次のものへと引き上げられ、慈育的に見守られ、そして、その力が守護されているのである。そして、これらのことは上位の作用者が下位の作用者に対して持つ力の卓越性に由来するのである。

さて、ここまでで明らかとなった cooperatio の特徴を簡単にまとめてみよう。すなわち、トマスがこの語を神と被造物の間に置くのは、上位の作用者の意図を受けて、下位の作用者がその働きの媒介 (medium) として結果を産出

するという場合であった。そして、そうした事態の背後には、下位の作用者が上位の作用者の持つ力によって、高揚され、配慮され、また守護されるという三つの性格が隠れているのであった。それでは、先に見た神と自然的作用者の関係とは、果たして cooperatio が含意するこのような特徴を完全に満たすものなのであろうか。我々は次に、この点を確認することにしよう。

#### 4 自然的秩序と超自然的秩序

我々は前節においてトマスの cooperatio に関する説明に耳を傾けてきた。その作業を通じて、トマスが「一方が他方に協働する (cooperari)」と言う事態の指す内実が或る程度明瞭なものになったと思われる。我々が次に考察すべきことは、こうした cooperatio の持つ特徴を、神と自然的作用者の関係と恩寵を通じての神と人間の関係とが共に満たしているかどうかを見ることであろう。それによって、トマスが恩寵を通じての神と人間の関係にはこの語を当て、神と自然的作用者の関係にはこの語を当てないことの意味も明らかになるであろう。

ところで、トマスにあって、被造の世界は個々の可滅的な事物に至るまでその一切が神によって統宰されているものとして説明される。それゆえ、先に見た cooperatio の二つの性格、すなわち、配慮 (providentia) と守護 (custodia) は、いかなる神と被造物の関係にあっても常にそれが満たされていると考えてよい。実際、物的被造物はその身が消滅することのないように常に神からの守護を必要とするし、霊的被造物もまたその意志が神から離反することのないように常に神からの守護を必要としているのである<sup>19)</sup>。しかし、「高揚 (elevatio)」という cooperatio の第三の性格はどうであろうか。それら二つの性格と共に「高揚」という働きもいかなる神と被造物の関係にも適用されると言い得るのだろうか。

トマスは、自然的事物の働きと人間が恩寵を通じて為す功徳的な働きの性格を次のように規定している。

それゆえ、我々は、諸々の自然的事物にあつて、いかなる事物も自らの働きによって能動的な力を超え出る結果を遂げることはできない、ということを目にするのである。むしろ、そこで可能なのは、自らの働きを通じて、その力に対比した結果を生ぜしめることだけである。他方、永遠の生命は、前述のことから明らかなように、人間の自然本性への対比を超え出る目的である。したがって、人間は自らの自然本性的な能力によっては永遠の生命に対比した功徳的な業を生ぜしめることは不可能であり、その為に恩寵の力というより高い力を必要とするのである<sup>19)</sup>。

トマスはこの箇所において事物がそれぞれに持つ自然本性との「対比 (proportio)」ということをキー概念とし、自然的事物の働きと恩寵を通じての人間の働きという二つの働きの次元を区別している。すなわち、自然的事物は神によって賦与された形相をもとに、何らかの確定された働きを行っている。しかし、それは常に自身の自然本性に対応する働きであつて、神によって生来的に賦与された能力以上のものでは有り得ない<sup>20)</sup>。これに対し、恩寵を通じての人間の功徳的な働きはこうした自然的事物の働きとは異なっている。それは自然的事物の働きのように自身の自然本性と釣り合いのとれた働きではない。というのも、人間が功徳的な働きを通じて希求するところの至福は神的な次元への参入を意味するがゆえに、我々の自然本性が到達できる領域を遥かに超えているからである。それゆえ、トマスは、我々がそうした至福に値する働きを為すためには、神の恩寵を通じてその自然本性を超えた状態にまで高揚する (elevare) 必要がある、と言うのである<sup>21)</sup>。トマスが恩寵についてよく述べるように、恩寵とは人間の魂を何らかの超自然的生命にまで高揚させる (elevare) 完全性を意味する言葉なのである。これら二つの働きは「自然的秩序」と「超自然的秩序」という伝統的な用語を以て叙述することも可能であろう。勿論、恩寵は或る意味で人間にとって自然的であるとも言えるから、両者の間に何らかの連続性があることは否定できない。しかし、恩寵は喪失可能なものでもあるがゆえに、両者はその秩序を異にするものとして峻別されねばならないので



ある<sup>22)</sup>。そして、*elevatio* ということが神と被造物の間で言われるのは後者の次元なのである。

このように、*cooperatio* は、トマスにあって、主に自然的秩序の世界を超えた超自然的秩序に含まれる事柄を指す機能を持っている。実際、そのことは恩寵に関する彼の著作のいたるところにおいて、*supernaturaliter* や *excedere facultatem naturalem* などという言葉が見出されることによっても確認できる。また、こうした文脈での *cooperatio* の使用は、人間が神の恩寵を通じて奇跡的な業や預言を行ったり、祈りを捧げる場合や、奉仕者 (*minister*) が諸々の秘跡を執り行う場合にも見出されるのである<sup>23)</sup>。

とはいえ、トマスにあって、人間が神からの恩寵の授与を通じて超自然的世界に参与を果たす際には、常に神と人間の間には *cooperatio* という語が当てはまるというわけではない。この語が主に神と人間の間には認められるのは、人間自らもその働きに参与し得るような場面に限られている。この点は、前節で見た *cooperatio* の基本的な意味からも確認することができる。その際、人間は神によって動かされ、また自らを動かすもの (*movens et motum*) として働いているのである。つまり、それが功德的な働きである。それゆえ、*cooperatio* が成り立つのは、神と人間が共に働くものと呼ばれるような場面であって、義化のような神のみが原因であり、人間が完全に受動的な立場に立つ場面ではないのである<sup>24)</sup>。

本節において我々は *cooperatio* の持つ特徴を神と自然的作用者の関係が満たすものであるか否かという問いから出発し、考察を進めてきた。以上のことからこの問いに答えるとすれば、神と自然的作用者の関係はこの語が含む内実を完全に満たすものであるとは言い難い。この語の持つ「高揚 (*elevatio*)」という性格を満たすのは、事物が自然的秩序の内での働きを行う場面ではなく、むしろ人間が恩寵を通じて超自然的な秩序に参与を果たす場面なのである。

ところで、自然的事物の働きと人間の功德的な働きとは、そこに程度の差異こそあれ、神を第一動者とするという点では働きの構造を同じくする。とすれば、我々は神によって創造された同じ被造物相互間の働きが自然的秩序と超自

然的秩序に区別される根拠をどこに求めるべきであろうか。更に言えば、神と自然的作者者の関係と、恩寵を通じての神と人間の間にはその在り方を巡ってどのような相違が見られるのだろうか。我々は次にこの点を確認することにしよう。

## 5 人間の自然本性と恩寵

トマスにおいて、神はその知性の内にある何らかの理念をもとに被造物を夫々に相応しい仕方でも動かす、個々の被造物に見合った究極目的へと秩序付けるものとして説明されている。その際、神は被造物に摂理の遂行者としての役割を与え、それらを動かすことによって被造物が自身のもとへと到達することを企図しているのである。こうした被造物の神への還帰という図式は、被造物の側からも説明可能である。すなわち、被造物は全て自身の内にある自然本性的な傾向性を満たす為に神との結合を求めている。それは上位の被造物のように知性や意志の力を持たない下位の自然的事物にあっても変わらない。下位の諸事物もまた、必然的な因果法則に従いその運動を繰り返すという自身の本性に適った仕方でも神を目指しているのである<sup>25)</sup>。このように、被造物は夫々に相応しい仕方でも神を目指しているのであるが、理性的被造物たる人間の神への還帰の仕方は下位の諸事物のそれとは大きく異なっている。確かに人間は身体という質料の内に創造された被造物である以上、自然的世界の一部として存在している。その意味で我々は人間を自然的事物 (*res naturalis*) として捉えることも可能である。しかし、人間は、その本来的な規定からすれば、ただ他者によって動かされることしか知らない自然的事物とは違い、その知性と意志の能力を以って自らの行為を取捨選択しつつ神そのものとの結合へと向かうことができる<sup>26)</sup>。そこに自らの行為に対して支配権を持つ人間の卓越性があるのである。

こうした被造的世界における人間の特別な在り方は、神が被造物に注ぐ愛の相違という点からも説明することができる。すなわち、下位の自然的事物も、その上位に位置する理性的被造物と同様に神の寵愛に与っている。諸々の被造

物は全て神が授けるこの「共通的な愛 (dilectio communis)」の下でその自然本性的な存在を有している<sup>27)</sup>。我々が第2節で見た神と自然的作用者の関係もこの次元において捉え直すことが可能である。しかし、神の似像として、諸々の被造物において卓越した位置を有する人間にあっては、こうした被造物一般に対する共通的な愛以上の「特別な愛 (dilectio specialis)」を以って永遠的な善の到達へと引き寄せられているのである<sup>28)</sup>。この意味で、個々の人間は神によって無条件的な仕方で (simpliciter) 愛されているとされる。

しかし、人間は神からの特別な寵愛を受ける存在であるが、その本性的な働きに神との協働 (cooperatio) が成立しているわけではない。そこで問題となるのは、神との「co-」という次元の卓越性と共に、人間の現在置かれた状態である。実際、第4節で見たように、功徳的働きという神との協働の次元は被造的本性を超えた永遠的善であるとされていた。しかし、人間は、その現在置かれた状態を見る限り、原罪によって墮落し、今やその本性に完全に適合した働きさえも出来ないほどに弱められているのである。それゆえ、トマスは人間が功徳という神との協働行為を為すために、第一にその墮落した自然本性の回復が、第二にそうした永遠的善を為すためにより高次の本性へと導く恩寵が二段階にわたって必要だと言う<sup>29)</sup>。換言すれば、トマスの規定上、神と「共に (co-)」働くと言われる地平が開かれることになるのは、我々の自然本性、つまり存在そのものが恩寵を通じて神的本性 (natura divina) を分有する限りでのことなのである<sup>30)</sup>。実際、トマスにあって、神との間に生まれる友愛 (amicitia) は恩寵の授与をその基礎に置くものであり、そこにおいて人間は「神の子 (filius Dei)」としての生を新たに与えられるとも言われているからである<sup>31)</sup>。つまり、神と被造物とは総じて存在論的身分の異なるものであるが、恩寵を通じて人間が神と協働すると言われる際、そこには人間が自然的物として括られる場合よりも遥かに近い神との関係が既に整えられているのである。その意味で、それら二つの被造物、つまり自然的物と、恩寵を通じて神と協働する人間とは神に対して立つ地平を巡って大きな相違があるのだと言える。

以上において、神との「co-」という次元が主に人間を中心として与えられ

ていることの理由が、そして、その際の神と人間の結びつきの特質が幾分か明瞭なものになったと思われる。最後に我々は、ボナヴェントゥラら同時代の神学者の用法に反して、*cooperatio* という語を恩寵の文脈に集中させることによって可能となったトマスの立場が含意するものをまとめてみよう。

## 6 結語：考察のまとめ

本稿では、*cooperatio* という語に関するトマスの理解を考察することで、彼がこの語を用いる際に意図するのが恩寵を通じての神と人間の関係にあること、そして、この種の理解がボナヴェントゥラらにはないトマス固有のものであることを明らかにした。

我々は、以上の考察から、冒頭で挙げた「何故トマスにあって *cooperatio* という語は神と自然的作用者の関係に用いられてこないのか」という問いに対して次のように答えることができよう。すなわち、トマスの *cooperatio* という語に関する規定からすれば、この語の持つ性格は神と自然的作用者の関係には完全な仕方で合致することはない。この語が含む内実は、人間が神からの特別な愛を受けて自然的な秩序を超えた領域にまで高揚する (*elevare*)、恩寵を通じての関係において満たされるものだからである。そして、そこには恩寵の授与を通じて芽生えた神と人間の親密な交わりがあるとされた。それゆえ、我々が第2節で見た、神と自然的作用者の関係についてのトマスの説明が両者の存在論的身分の相違を強調したものであったということも、ここでの神と人間の結びつきを考慮に入れることで初めて理解することができる。言い換えれば、神と自然的作用者の関係についてのトマスのそうした説明は、恩寵を通じての神と人間の親密な結びつきを念頭に置いた上で為されていると言えるのである。

ところで、*cooperatio* という語を巡って区別されるこれら二つの神と被造物の働きの関係は、自然の世界と恩寵の世界の間の区別をも示しているとも言える。勿論、それら二つの世界に属する働きがその次元の異なるものであることはボナヴェントゥラら同時代の神学者らも一様に認めることであろう<sup>32)</sup>。しかし、それら二つの働きをこの語の内に共に包含してしまえば、それら二つの次

元の相違は詰まるところ程度の差にしか帰されない。トマスは、この語を神と人間のみならず神と自然的作用者の関係にも当ててしまうことになれば、それら二つの秩序の隔たりを覆い隠してしまうことに繋がりがかねないと考えたのである。そして、トマスはこの語が神との間で本来的に用いられる次元を恩寵の場面に据え置くことによって、これら二つの働きの次元の相違を際立たせることに成功したと言えるのである。

### 注

\* 本論文は第56回中世哲学会（2007年11月10日 於広島大学）での研究発表に基づいています。発表や論文執筆にあたって貴重な示唆や忠言を賜った多くの方々、とりわけ今年1月にご逝去された長倉久子先生に感謝申し上げます。

- 1) 第一原因 (causa prima) と第二原因 (causa secunda) は、13世紀の思想界で頻繁に用いられた語であるが、これは被造の世界に生じる事象の原因、つまり神と被造的作用者のことを意味する。例えば、植物の生長の場面を考える際、その事象の原因は当の植物が生来的に有している力に帰されると共に、それを根底から支え、動かしている神にも帰されることになる。その際、神が第一原因とされるのに対し、植物は第二原因とされる。また、第二原因という語は、人間の意志的行為を含めた被造の世界に起こる事象一般をその対象とするが、本稿では、この語の対象を主に自然的世界に生じる事象におく。
- 2) 例えば以下の箇所がそうである。Albertus, *S. T. I, t. 13, q. 65*; Bonaventura, *In I Sent.*, d. 38, a. 1, q. 1, c.; *Q. de scientia Christi*, q. 4, resp.; Ockham, *In II librum Sententiarum Ordinatio*, d. 42, q. unica; Petrus Olivi, *Lectura super Genesis*, C. 7; Petrus Thomae, *Quodlibet II*, q. 12, a. 1-3; Scotus, *Lectura I*, d. 2, p. 1, q. 2.
- 3) 実際、16世紀以降のトミストラはこのような意味で第一原因と第二原因に関するトマスの教説に cooperatio という語を当ててきた。Báñez, *Scholastica Commentaria*, p. I, q. 8, a. 1; De Molina, *Concordia*, p. 152f.; Suarez, *Disputationes Metaphysicae*, D. 22, C. 21. こうした態度は現代の一部の中世哲学史家によっても引き継がれているようである。M. Grabmann, *Thomas von Aquin*. (Verlag Kösel: Auflage, 1949) pp. 121-123; C. Hart, *Thomistic Metaphysics*. (Englewood Cliff, N. J.: Prentice-Hall, 1959); B. Lonergan, *Collected Works of Bernard Lonergan, vol. I*. (Toronto: Toronto UP, 2000) pp. 303-304; H. Mayer, *The Philosophy of St. Thomas Aquinas*, tr. by F. Eckhoff. (St. Louis: B. Herder Book, 1954) pp. 268-271. 彼らが cooperatio をトマスの教説に当てる

背景には、パニェス主義とモリナ主義との間の論争がある。すなわち、神と被造物が同一の結果に関わるという事態を考える際に、16世紀のドミニコ会士であったパニェスは神の *praemotio* を主張したのに対し、モリナは両者の *cooperatio* を主張した。16世紀以降のトミストらはこうした枠組みの下でこの語をトマスの教説に帰しているように思われる。本稿では、こうしたトミストらの解釈史については取り扱わない。

- 4) *In II Sent.*, d. 1, q. 1, a. 4, c.; *Q. de potentia*, q. 3, a. 7, c.; *S. C. G.* III, C. 66-70; *S. T. I*, q. 105, a. 5, c.; III, q. 19, a. 1, c.
- 5) 本稿では同時代の一部の神学者が用いている *concursum* という語については考察を行わない。*concursum* 或いは *concurrere* は、「合流」や「出合い」、「共に働くこと」などと訳され、複数の原因が或る結果の生成の為に寄与することを意味する。*In V Metaph.*, l. 3, n. 793; *Contra errores Graecorum* I, C. 23. Cf., J. Aertsen, *Nature and Creature, Thomas Aquinas's Way of Thought* (N. Y.: E. J. Brill, 1988) p. 131. それゆえ、この語の意味は *cooperatio* と若干重なる部分がある。しかし、トマスにあって、この語は主に被造物の世界に起こる偶然的な事象を表す際に使用されているように思われる。これについては、以下の箇所を参照。*S. C. G.* III, C. 74; *S. T. I*, q. 47, a. 1, c. Cf., J. -P. Torrell, "Nature et grâce chez Thomas d'Aquin," *Revue Thomiste* (101) 2001, p. 200, n. 84; Boethius, *Consolatione Philosophiae* V, p. 366, l. 43-p. 367, l. 58; Bonaventura, *In II Sent.*, d. 37, a. 2, q. 3, c.
- 6) この問題について、以下の詳細かつ明瞭な研究を参考にした。B. Shanley, "Divine Causation and Human Freedom in Aquinas," *American Catholic Philosophical Quarterly* (72) 1998, pp. 101-111; 川添信介「トマス・アクィナスにおける神と第二原因の関係」、『人文研究』(37) 1985年, 243-265頁。
- 7) *Q. de potentia*, q. 3, a. 7, c.
- 8) *S. C. G.* III, C. 66; *S. T. I*, q. 105, a. 5, ad 2.
- 9) 例えば、ボナヴェントゥラの以下の箇所を参照。Bonaventura, *Breviloquium*, p. 2, C. 12; *Q. de scientia Christi*, q. 4, resp. ボナヴェントゥラは、神と被造物の協働 (*cooperatio*) を、神の痕跡 (*vestigium*)、像 (*imago*)、類似 (*similitudo*) という被造物の世界の三つの段階に合わせて考えている。そして、それら三つの段階に応じて、神の被造物に対する働きかけも三様に区別される。すなわち、痕跡においては、神は自然的原理及び原因として働き、像においては、知性と意志の対象としてそれらの働きを促すものとして働き、恩寵による類似においては、功徳的行為を達成させる為の超自然的賜物を注ぐものとして働くのである。長倉久子「ボナヴェントゥラのイマゴ・デイ論について」、『中世思想研究』(18) 1976年, 49頁。
- 10) トマスが用いた聖書ではこの箇所は「我々は神の扶助者である (*Dei sumus adiutores*)」となっている。『第一コリント書』第3章第9節である。トマスによれば、ここでの神の扶助者とは、神の与える恩寵を通じて、神の戒め (*mandatum*) を全うす

る者という意味である。神の与える戒めや指示の遂行ということは、神と被造物の間に cooperatio が用いられる際に共通して現れる特徴の一つである。Super I Cor., C. 3, l. 2; II, C. 6, l. 1; J. -P. Torrell, *Saint Thomas Aquinas, Spiritual Master*, tr. by R. Royal. (Washington, D. C.: The Catholic Univ. of America Press, 2003) pp. 169-172. また、上記の聖句に関して、トマスは好んで擬ディオニュシオスの『天上位階論』の一節を引用しつつ、「全ての中でより神的なことは神の協働者になることである (omnium divinius est Dei cooperatorem fieri)」と言い換えている。このことはトマスが神との「co-」という次元の卓越性を考える上での一機縁になっているようにも思われる。Cf., Albertus, *Super Dionysium de caelesti hierarchia*, C. 3.

- 11) この語の「神の業の媒介となる」という意味での理解はトマス独自のものではない。こうした理解は、既にアウグスティヌスの中にも見出される。Augustinus, *De Civitate Dei* XVI, C. 5. むしろ、後述するように、トマスの独自性はこの語の内実を吟味し、その文脈を限定したところにあると思われる。
- 12) *Contra errores Graecorum* I, C. 23.
- 13) *In II Sent.*, d. 35, q. 1, a. 4, c.; S. C. G. III, C. 100.
- 14) トマスの用語法を纏めた *Index Thomisticus* には、cooperatio はその活用形を含めて 399 の用例が網羅されている。しかし、その内の半数を超える用例が恩寵を通じての神と人間の関係に集中している。例えば、以下の箇所がある。In *IV Sent.*, d. 24, q. 2, a. 1; *Q. de veritate*, q. 24, a. 10-11, et q. 27, a. 3, c.; S. T. I-II, q. 111, a. 2; III, q. 19, a. 3; III, q. 86, a. 5, ad 2. この種の用例は特にパウロ書簡に対する註解において顕著である。
- 15) *Super Matthaenum*, C. 25, l. 3, n. 2096.
- 16) S. T. I-II, q. 111, a. 2, ad 3. 作動的恩寵が神のみを原因とし我々が完全に受動的な立場に立つものであるのに対し、協働的恩寵は神と人間の自由意志とが協力して働く場合である。後に第5節で述べるように、功德的な働きを行うという場合にあって、人間の存在そのものを高揚させ義なるものとする作動的恩寵は、協働的恩寵に先立って我々に働きかけている。
- 17) *Super de divinis nominibus*, C. 4, l. 1, n. 284.
- 18) *Ibid.*, C. 4, l. 1, n. 279; S. T. I, q. 102, a. 3, c.
- 19) S. T. I-II, q. 109, a. 5, c.
- 20) *Ibid.*, q. 109, a. 1, et 5.
- 21) *Ibid.*, q. 109, a. 9, c.; *Comp. Theol.* I, C. 143-144. elevatio は通常その事物が属するところの秩序を飛び越える意味を持つ語として使用されている。S. C. G. III, C. 53; *Super II Cor.*, C. 12, l. 1; S. T. I, q. 12, a. 5, c.
- 22) 長倉久子「トマス・アクィナスにおける神の像なる人間について」、『中世思想研究』(11) 1969年, 98-106頁。トマスの用語法からすれば、これら二つの働きは「自然の業

- (opus naturae)」と「恩寵の業 (opus gratiae)」としても区別される。S. T. I-II, q. 65, a. 3, c.; III, q. 9, a. 3, ad 3; III, q. 13, a. 2, c.
- 23) *In IV Sent.*, d. 8, q. 2, a. 3, ad 2; S. T. III, q. 85, a. 4-5; *Q. de potentia*, q. 6, a. 4; *Q. de veritate*, q. 27, a. 3. そうした場合においても *elevatio* という特徴は満たされている。
- 24) S. T. I-II, q. 111, a. 2. 罪人を義とする働き全体は恩寵に属するものでありつつも、恩寵によって内的に動かされる人間の自由意志の働きが完全に排除されるというわけではない。初期の『命題集註解』では、人間が恩寵を受け取るに足る状態へと自身を準備する為に神と協働する (*cooperari*) ともある。 *In IV Sent.*, d. 17, q. 1, a. 2, qc. 1, c.
- 25) S. T. I, q. 103, a. 5-6.
- 26) S. T. I-II, q. 1, a. 2, c.; *Q. de veritate*, q. 24, a. 14, c.
- 27) S. T. I-II, q. 110, a. 2, c.; 桑原直己『トマス・アクィナスにおける「愛」と「正義」』(知泉書館, 2005年) 351-352頁。
- 28) *Ibid.*, q. 110, a. 1, c. トマスは、このことを「神が自然の業においてよりも恩寵の業においてより不完全な働きをすることはない」という確信のもとで話を進めている。S. T. I-II, q. 65, a. 3, c.; 桑原直己 *op. cit.*, 351-352頁。
- 29) S. T. I-II, q. 114, a. 2-3; S. C. G. III, C. 147. 勿論、人間はこの状態にあっても、何らかの個別的な善を為すことが可能である。しかし、神との協働が成立するのは、至福に値する超自然的な善を為す場合に限られる。その際、それら二つの善は、働きの実質 (*substantia*) ではなく、その在り方 (*modus*) が異なっているのである。例えば、「施しを与える」という善の業を採った場合、個別的な善の業はそれが人間の自然的な愛や親切心由来するのに対し、超自然的な善の業は聖霊によって注入された神愛 (*caritas*) に由来している。その際、個別的な業は自らの本性に対比的な働きに過ぎないが、超自然的な業はその本性を超え出た働きである。 *Q. de veritate*, q. 24, a. 12, et a. 15; S. T. II-II, q. 171, a. 2, ad 3.
- 30) S. T. I-II, q. 114, a. 2, c.; 三谷鳩子「トマスの恩寵論におけるハビトゥス概念の一考察」、『中世思想研究』(49) 2007年, 107-108頁。
- 神との協働は、我々が属する存在の秩序とは無関係に、単に働き次元において成立しているわけではない。確かに、功徳的な行為は神愛によって強められた我々の能力を基盤としている。しかし、我々が神愛を通じて功徳的な働きを為し得るのは、恩寵を通じて我々が神的な存在 (*divinum esse*) を分有することによって可能になるのである。その意味で、神の恩寵は〈より先〉に我々の存在に到来し、それをより高次のものへと導いているのである。トマスにあって「働くことは存在に付随する (*agere sequitur ad esse*)」であって、その逆ではない。 *Q. de veritate*, q. 27, a. 2, c.
- 31) S. T. I-II, q. 110, a. 3, c. トマスは神の恩寵を受ける以前と以後とで人間の状態を区別し、後者の内により高い完全性を見て取っている。恩寵によって義とされた人間は或



る意味で神と形相的に一つになると言われる。 *In I Sent.*, d. 48, q. 1, a. 1, c.; *S. T. I-II*, q. 111, a. 1, ad 1.

32) Bonaventura, *In I Sent.*, d. 17, p. 1, a. 1, q. 1, sed c. 7; d. 37, p. 1, a. 3, q. 1.